

いに多少なりとも肯定的な感情を持っている国民の割合はせいぜい 2 割という残念な結果となっています。

これに関連して、三点申し述べたいと思います。第一に、日中双方が、「平和」を旗印として掲げていることをしっかり認識することが大事です。中国は、改革開放政策に基づく平和的發展を掲げています。そして、日本は、中国の平和的發展及び改革開放以来の發展が日本を含む国際社会に大きな好機をもたらしていることを評価しています。13 億という巨大な人口を有する中国の急速な發展は、世界史上初めての壮大な実験と言えるでしょう。そして、その壮大な実験は、順風満帆に進んでいるわけではありません。先般の第 17 回党大会で「科学的發展観」が党規約に盛り込まれましたが、これは、とりもなおさず、中国が直面している貧富の格差、教育・医療・就業問題、環境保護や省エネ、腐敗の深刻化等の切迫した課題を抱えている証左でありましょう。壮大な実験を成功させるためには、平和で安定的な国際環境が必要条件であり、それ故に「平和的發展」を掲げているということだと思えます。中国の急速な發展に不安を感じる日本やその他の国々の人々は、この点について、もう少し理解を深める必要があると思えます。

他方、日本といえば、先の大戦への深い反省の上に、戦後 60 年余、謙虚に国造りと国際貢献に邁進し、一貫して平和国家として歩んできました。中国では、「日本軍国主義の復活」を心配するといったことが折に触れ言われてきたようではありますが、これは日本国民にとっては、およそピンと来ない認識です。昨年 10 月の日中首脳会談において、中国の指導者は、初めて日本の平和国家としての歩みを積極的に評価しました。これは、両国が互いの平和的姿勢を認め合うことで、両国が地域及び国際社会に更に貢献していく基盤が形成されたという意味で画期的なことであったと思えます。いずれにせよ、中国国民には、戦後の日本の平和国家としての歩みについてもっと理解を深めて頂きたいと思えます。

第二に、日中両国国民、とりわけ日中両国の次代を担う若者たちの直接交流を、大々的に粘

り強く推進していくことです。このことの重要性については、論を待たないところでしょう。本年 8 月に発表された別の世論調査によれば、9 割近くの日本人は中国を訪問したことがなく、日本を訪問したことのある中国人は僅か 1%にすぎません。また、84%の日本人には中国人の知り合いが全くおらず、92%の中国人に日本の知り合いがいません。若者は、柔軟で鋭敏な感性を持っています。メディアを通じて間接的にお互いを捉えるのではなく、直接、お互いの国を訪れ、或いは直接話をするので皆が皆互いに好感情を抱くということは無いでしょうが、少なくとも、きつと、より客観的な、より多様な見方を身につけることでしょう。日中関係の将来を見据え、両国政府を始め、地方、政界、学界、経済界、言論界等において全力で措置を講じていくべきです。迂遠なようでこれが王道です。

最後に、少しだけナショナリズムに触れたいと思います。日本、中国それぞれの外交関係において、日中関係ほど、ナショナリズムと密接な関係にある二国間関係はないのではないのでしょうか。私は、日中双方で、自国の歴史や先輩の作った文化に愛情と信頼感を持つといった「おおらかなナショナリズム」が必要であると思えます。そして、この自国の歴史や伝統に対するおおらかな自信を基礎として、相手国を理解しようとするのが、結局は互いの国益に資するナショナリズムであると思えます。

以上、一言で申し上げれば、とにかく、最大限多くの日中両国民が、最大限ともに協働作業に汗を流し、最大限、直接互いに自分の目で見て、自分の耳で聞いて、話し合うということの他にありません。先ほど、人の往来や貿易関係に触れて日中関係は切っても切れない関係と申し上げましたが、「戦略的互惠関係」の構築に至るまでには、まだまだ「共益の拡大」と「相互理解の強化と国民感情の改善」を気長に一步一步積み重ねて行かねばなりません。

本シンポジウムが、日中両国の国民が、「共益の拡大」と「相互理解の強化及び国民感情の改善」を実践していくための多くのヒントを日中両国民に提供して頂けることを祈念して、私の基調講演とさせていただきます。